

アフターコロナは来ない!?! 「ウィズコロナ時代」が長く続きそう

真野俊樹：中央大学大学院戦略経営研究科教授、多摩大学大学院特任教授、医師



新型コロナウイルスについてさまざまなことがわかってきた。現時点の情報で考える限り、新型コロナウイルスの感染拡大は、そう簡単には終息しそうになく、「ウィズコロナ」の状態が長く続きそうである。政府はもとより、企業や個人も「ウィズコロナ時代」を前提に、将来の対応を考えるべきである。そこで、産業医としてのアドバイスも交えて解説する。

新型コロナウイルスは変異する

医学的に細かい話を抜きにすれば、ウイルスは、DNAウイルスとRNAウイルスの2つに大別される。

新型コロナウイルスの場合、後者のRNAウイルスである。これは何を意味するのであろうか。

同じように、RNAウイルスであるインフルエンザウイルスで考えてみよう。

インフルエンザウイルスは自分の力では増殖することができず、感染した細胞の中で自分の遺伝子のコピーを多数作り増殖する。その結果、インフルエンザウイルスに感染したほとんどの細胞は死滅し、そこから多数のウイルスが広がる。

また、インフルエンザウイルスの遺伝子はRNAで、このRNAは誤ったコピーが発生しやすい。つまり、変異が起きやすい。

一度、インフルエンザにかかったのに、再感染があるのは、このように変異したインフルエンザウイルスに感染しているからである。つまり、対応する抗体ができにくいことになる。

新型コロナウイルスでは、どうだろうか。

新型コロナの「再感染」は起こりうる

さまざまな調査で新型コロナウイルスに対する抗体は、2カ月の単位で減衰することわかってきた。すなわち、「再感染が起こりうる」ということである。

さらに、上述したような変異の影響もあるようだ。

遺伝子変異を起こした新型コロナウイルスに再感染した患者も報告されるようになってきている。

例えば、香港在住の33歳の男性は新型コロナウイルスのPCR検査を受けたところ、2020年3月26日に陽性と判定された。退院から4カ月後に当たる8月15日、スペインから英国経由で香港に帰国したこの男性が検疫所でPCR検査を受けたところ、陽性となって、2度目の感染が発覚した。

そして、3月と8月に採取されたPCR検査用の検体を用いて、ウイルスのゲノム配列を調べたところ、それらは異なる系統のウイルスだった。

もっとも、再感染では、重症化しない可能性もあり、悲観一辺倒ではないが、“再感染が起きる”ということは、今後の新型コロナウイルス対策を考える時に、かなり大きなハンデになる。

ワクチンの開発の現状

新型コロナウイルスに対するワクチンの研究開発も盛んである。開発中の候補は全世界で約190種類にのぼるといふ。

どうしても、ワクチンは健常者に幅広く投与する点や免疫に作用するので効果や副作用の解釈が難しい。

最も先行しているといわれているのが、大手製薬会社のアストラゼネカとオックスフォード大学が共同開発しているアデノウイルスをベクター（運び屋）としているワクチンだ。ところが、9月9日、英国の試験で被験者1人が原因不明の症状を発症し、第三者委員会による評価のため、すべての試験を自主的に中断したが、第三者委の評価を経て12日には英国で試験を再開した。

ほかにも、米モデルナのmRNAワクチン、独ビオンテックと米ファイザーのmRNAワクチン、米ジョンソン・エンド・ジョンソンのウイルスベクターワクチン、国内では、大阪大とアンジェスが共同開発するDNAワクチンなどの開発が進んでいる。

ここでもインフルエンザのワクチンのことを思い出してほしい。産業医をしているとよく話題に出るのが、インフルエンザのワクチンを打ったけれどもインフルエンザになってしまったという話である。これは、その冬に流行しているインフルエンザと違う型にしか効果がないワクチンを打ってしまったということになる。

従って、新型コロナウイルスワクチンに関しても、インフルエンザのワクチン同様、さまざまなタイプについて対応できるようなワクチンが必要であったり、あるいは毎年ワクチンを接種することが必要になる可能性が高い。

それは言い換えれば、インフルエンザウイルスと同様に、我々が新型コロナウイルスと共存しなければならないことを示す。

アフターコロナは実現しない？

筆者は「技術の進歩」を信じる方であるので、何かブレイクスルーがあることを期待している。ワクチンも最新のものなら、私の心配は杞憂に終わるかもしれない。

しかし、現状では今まで述べてきたようにコロナウイルスの対策によって、すぐには「コロナの終息」、つまり「アフターコロナ」を実現することはできないのではないかと考えている。

ウィズコロナの状況が長くなりそうなことを予感させることを書いてきたわけだが、そんな中で、筆

者が考えるウィズコロナの状況を産業医視点で考えてみたい。

産業医視点によるリモートワークの評価

産業医視点で、一番問題になるのはリモートワークについてだと思うのでこの点について詳しく考えてみたいと思う。

まずリモートワークの生産性については、既にさまざまな調査結果が出ており、結論から言えば職種によって向き不向きがあるものの、なかなか全てをリモートワークに置き換えることができる企業は少ないと思われる。

さらに、産業医をしていて、問題点としてよく聞くことは、隣に同僚や上司がいないのでちょっとした相談ができないとか、自宅で一日中誰ともしゃべる機会がなかったとか、家の環境が仕事になかなか適さないとかさまざまである。

しかし一方で、通勤の負荷が減ったり、遠距離への出張の負荷が減ったり、場合によっては引っ越しなどの回数が減ったりと、プラス面での大きな変化が起きてきていることも事実である。

いずれにせよ、少なくともウィズコロナの状況が年単位で継続されると考えれば、すでに述べてきたようにマイナス面はありつつもプラスの面も大きいリモートワークが、全くなくなるということは考えにくい。

リモートワークとうつ病

さらに、コロナ禍で家にいること、あるいはコロナという病気が不安でうつになるという「コロナうつ」という言葉まで出てきた。しかしながら、筆者の見限り、リモートワークはうつ病などメンタルに不安を抱えている会社員には、かなり優れた勤務形態だと考えている。

満員電車で通勤する負荷もなく、上司と面と向かって受けるストレスがあまりない状況は、やはりうつ病患者などのメンタルに不安がある人にとっては、家で休養しているほどではないにせよ、疾病にかなりのプラスの効果があると考えられる。また在宅勤務を併用して復帰を行うことも可能である。

「ウィズコロナ時代」は長く続く可能性

コロナ禍によって、いろいろな変化が促進された。あるいは、促進されるという見方がある。リモートワークもその一つかもしれない。

筆者らも大学院での教育においてリモート授業を取り入れたりしている。従来であれば対面がメインであったが、一部にリモートを取り入れたり、場合によってはハイブリッドの授業といった新たなスタイルを模索し、社会人の大学院生の利便性を考えることもできるようになった。

述べてきたように、「ウィズコロナ時代」が長期間続くとなれば、我々の行動パターンはかなり変わることになるであろう。そのプラス面とマイナス面を考慮しつつ、さまざまな変化を前提に、将来を考えていくことも必要ではなかろうか。

◎参考文献

<https://academic.oup.com/cid/advance-article/doi/10.1093/cid/ciaa1275/5897019>